

茶筥

そりさげは、今の大ヤツコあたまるべし、

〔總見記〕齋藤山城守於富田對面事

道三ハヒソカニ富田ノ町末ニ小家ヲ借リ隠レ居テ、信長ノ御出ノ様子ヲ伺ヒ見ラレケリ、信長其日ノ御出立、イツモニ増リテ異風ナリ、先ヅ御髪ハ萌黄ノ平打ノ糸ヲ以テ卷立卷立茶箋ツブリニ結セラル、

〔用捨箱〕下温鈍の看板芋川

昔は温鈍おこなはれて、温鈍のかたはらに、蕎麥きりを賣略○中 温鈍屋にて、看板に額あるは楡形したる板へ、細くきりたる紙をつけたるを出し、が、今江戸には絶たり、略○中

桃の實元祿六年

打かまねくか温鈍屋の幣

吉原はわざともほどく茶筥髪

とあれば、吉原の温鈍屋にも、此看板のありしなるべし、

〔柳亭筆記〕四男子の髪のゆひぶり 名種々井額月代

茶筥髪 新續犬筑波集 ぶりのよき柳やいは、茶筥髪 政通略○中

寶藏茶筥の條、茶筥髪は無禮なる物ながら、折にふれ、取合たる處あり、女郎とくるひて、打みだれたるはさきにて、茶筥にゆひたるもよし、

〔續山井春〕姿花

茶せんかみやいは、姿のはなのまへ

〔賤のをだ卷〕一義太夫節は有廟吉宗○徳川の御代より流行出しといへり、されば豊後ぶしの流弊、次第に淫風に移りて、遊士俗人の風俗、あらぬものに成行て、髪も文金風として、わけの腰を突立、元結

文金風

吉野山家 閑節

撰者 元峯

嵐雪